



『母乳育児学』

評者・井村 真澄 日本赤十字看護大学大学院

白を基調にしたシンプルで美しい表紙、厚さ7mm程度のハンディな本書を手に取り、執筆意図と斬新な内容構成を見て、驚きに近い感動を覚えた。本書は、これまでに類を見ない画期的な母乳育児の教科書であり、まさに圧巻である。

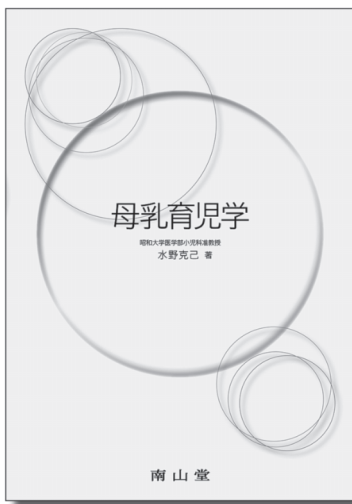
本書は、一義的には医学部学生向けに執筆されている。医学教育の中で「標準的」かつ「系統的」な母乳育児教育を行なうことを目標に、母乳育児のminimum requirementsが提示され、各章ごとに「学習するのに適した学年」や「行動目標(SBOs)」が記載されている。これは助産学・看護学・歯学・薬学にも共通するものである。

さらに巻末参考資料には、医師国家試験出題基準と問題、学生時代に履修すべき一般目標(GIOs)、研修医の学習案まで提案されている。この構成から、基礎教育から卒後教育までを見据え、臨床実践の変革を目指す著者の卓越性と先見性、そして静かな熱意が垣間見える。

では、ご一緒に見ていこう。最初のカラーページには、症例や母乳育児に関する写真が掲載されている。続く序文は必読である。その後の本文には、本書の執筆意図を反映してエビデンスに基づく知見が非常にコンパクトにまとめられ、系統的学習が進むようにさまざまな工夫がなされている。

「第8章 母乳で育っている児(正常な正期産

エビデンスとあたたかい まなざしで語る母乳育児の minimum essential



水野 克己 著

定価 1890 円(本体 1800 円+税 5%)

B5 版/南山堂/2012 年

児)と病態」を例にとると、冒頭に、この章は医学部の5年生で学習する内容であることが示されている。Key wordsは、ケトン体、高インスリン血症、breast-nonfeeding jaundice、母乳性黄疸、生理的体重減少、高張性脱水。SBOsとして「出生後の血糖の推移を説明できる」などが章の初めに掲示され、学習準備が整えられたのちに内容説明に入っていく。端的に整理された情報と図表が示されると共に、Column「正常な血乳とは」もあり、さらに理解が深まる。章の後半の「1か月以降の体重増加」の項では、「体重増加不良であると判断した時の対処」や「乳児健診にお

いて母乳育児を推進するために」等が説明される。章の最後には要点がまとめられ、SBOsに対応して学習内容を整理できるように工夫されている。一貫して、最新の良質な情報が、母子の状況に深く配慮した臨床医のあたたかく優しいまなざしに乗せて伝えられている。

多職種協働、チーム医療、ケア・支援の時代に、多職種が共通言語で語ることを可能にする共通基盤であるminimum essentialとして、母乳育児の標準的教科書が出現したことの意義は大きい。ぜひご一読になり、それぞれの分野で母乳育児教育/学習に役立て、ひいては対象者への質の高い支援につなげていただくことを大いに期待する。